

神奈川県立生命の星・地球博物館

友の会通信

Vol. 10, No 4 , 通巻 55 号 2007.1.10 発行

目次

身近な自然シリーズ…1・2	わたしの選ぶこの一冊…9
活動報告 ……3・4・5	会員の活動紹介…9
博物館の講座紹介 ……6	博物館NOW…10
ふ・し・ぎ…7	ミュージック・フェスタ2007…11
私の応援メッセージ…8	行事案内…12

博物館周辺の身近な自然シリーズ(その15)

2006 年秋の鳥

学芸員 新井一政

博物館が現在の地へ移転したのをきっかけに始まった「身近な自然発見講座」。コースはその日の気分次第。どのような動植物と出会うかは、まさに行き当たりばつりの出たとこ勝負。こんな講座を担当していると、自分自身、身近な自然に目を配っておかなければなりません。

今回は、退職した元同僚に博物館周辺の自然の近況を伝えるため、私的に発信している「カワセミ通信」から、今年の秋の鳥を抜粋してみました。

■10月22日

早川の河原から釣り人の姿が消え、さて、これからゆっくりカワセミの観察ができると思っていた矢先に、今年も河川工事が入りました。

今日は日曜日で工事は休み。昼休みに出かけてみましたところ、イマシタ！ それも2羽。代わるがわるにダイビング。上手に魚を捕まえていました。

博物館周辺では、南へ帰る途中に立ち寄って、9月末から先週までは毎日姿を見せていたノビタキの姿が見えなくなりました。越冬にやってくるジョウビタキは、例年ですと10月25日±1日で姿を現しますので、来週が楽しみです。

モズは、既にお互いの陣地（冬越しのための縄張り）が確定した様子で、キイキイ、キチキチという高鳴きは余り聞かれなくなりました。

確実に、秋が深まっています。

■10月25日

ジョウビタキがやってきました。今年もピッタリ10月25日。正確なものです。彼等の小さな体の中に、時計や羅針盤だけでなくカレンダーまでも内蔵



ジョウビタキ（メス）



ジョウビタキ（オス）

されているのです。感心せずにはいられません。これからしばらくの間は、彼等・彼女等の縄張り争いの追いかっけっこが楽しめます。ジョウビタキには、一冬を乗り切るための安全な罫（ねぐら）と、十分な食料が確保できるだけの広さの領土（縄張り）が、雌雄の別なく1羽毎に必要なのです。ですから、領土の境界が定まるまでは、争いが絶えないのです。争いと言っても、つつき合いや取っ組み合いをするわけではありません。ただひたすらに追いかっけ合い。一方が追い、片方がただただ逃げる。ある所まで逃げると形勢逆転。追われていた個体が俄然勇気を盛り返して反撃。今まで追いかけていた方は、今度はただ逃げるのみ。彼等の必死さを知っていても、見ている私はついつい口元が緩みます。

■10月26日

フェンスの上に、ジョウビタキが並んで3羽。オス1羽・メス2羽。1箇所ですべて同時に3羽も見られるのはこの時期だけの現象です。到着したばかりなの

で、追いかけてはこれから。今は鳴き声によるお互いの威嚇だけです。カワセミは声が聞こえただけで、姿は見えず。

■10月27日

河川工事で姿を消すかと思っていたカワセミたちは、餌場を上流の堰堤に移し、ダンプの際を見ては華麗なジャンプを披露してくれています。

ジョウビタキの追いかけては大分下火になってきました。博物館の早川側の縄張りは、最初に姿を見せたメスが獲得しそうな気配です。

秋晴れに恵まれ、長興山上空には絶好の上昇気流があるようです。ノスリが2羽、高く高く帆翔（はんしょう）しています。

■11月2日

大逆転が起こりました。今日出勤してみると、早川沿いには一昨日まで優勢のように見えたメスの姿はありません。代わりに立派なオスが2羽。1羽は博物館の前庭を中心に、もう1羽は第2駐車場前の植栽付近に縄張りを構えていました。どうやら今年はこれで決定のようです。

工事現場へのダンプの乗り入れが始まりました。カワセミは一時避難を余儀なくされています。どこへ行ってしまったのやら…。

■11月3日

またまた大逆転。本日午前中、入館者の通行が絶えない前庭一帯で、人影などまるで無視して、ジョウビタキ同士の激しい戦闘（ただし、追いかけて）が展開されました。

出勤途中、歩道橋の上で、ヒッ、ヒッ、ヒッ、ヒッ、ヒッ、と、異様に甲高い2羽のジョウビタキの声を耳にしました。注意していたところ、9:30頃、博物館前庭の東端にあるイチョウの周辺で戦闘が開始されました。1羽は昨日報告したオス。もう1羽は、昨日は姿が見えなかった（今年最初に到着したと思われる）メス。

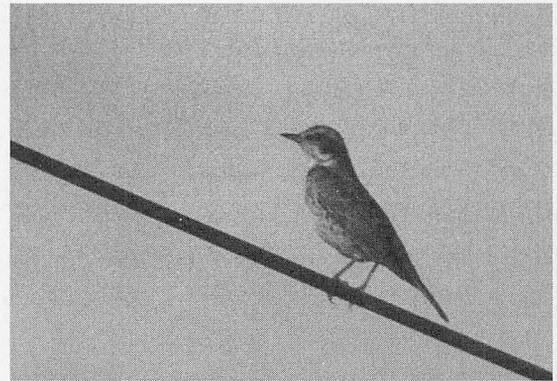
どこかに潜んでチャンスを窺っていたメスが反撃に出たようです。戦闘は超低空での曲技飛行の繰り返し。時には、博物館へ向かう家族連れの足元をすり抜けます。9:50頃、2羽が入り乱れるようにして川下に姿を消し、しばらくしてメスだけが戻り、イチョウのてっぺんで悠々と羽繕いを始めました。勝利したものと思われる。

■11月5日

ジョウビタキに続いて、ビンズイもアオジもやって来ました。カケスも山から降りて来ました。博物館周辺での常連の顔（冬鳥）がほぼ揃いましたが、ツグミは今年も到着が遅れているようです。そして、河川改修工事の影響でしょうか、ヤマセミとオンドリも姿を見せません。

きちんと統計を取っているわけではありませんが、ツグミは年々到着時期が遅くなっているようですし、個体数も減少しているようです。夏の生息地（繁殖地）で何か異変でも起きているのでしょうか。

温泉地学研究所前の植栽で、アマガエルの鳴き声を確認。朝夕はめっきり冷え込んできたというのに、元気な声でした。いつから冬眠に入ることやら。



11月14日、ツグミも姿を見せました

■11月9日

本日、長興山方面での身近な自然発見講座が開催されました。今回は、天気にも恵まれたのと、その割には参加者が少なかったのと、今までで一番長いコースを歩いてきました。通常の2回分の距離です。さすがに、足腰がだるく感じます。

出発前に、参加者全員でカワセミを観察に早川を訪れたところ、カワウの採餌場面に遭遇しました。全員が見守る中、巧みに潜水を繰り返し、かなり大きい魚を2回（尾）ゲットしていました。

長興山方面は、まだまだ紅葉とは無縁です。暗い林の中から見上げると、カエデの葉の鮮やかな緑が抜けるような青空をバックに輝いていました。

観察会で確認した鳥

カワウ、コサギ、アオサギ、トビ、ノスリ、キジバト、コゲラ、キセキレイ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、ヒヨドリ、モズ、ジョウビタキ、エナガ、ヤマガラ、シジュウカラ、メジロ、ホオジロ、アオジ、カワラヒワ、スズメ、カケス、ハシボソガラス、ガビチョウ（声）以上24種。

活 動 報 告

共催事業〈サロン・ド・小田原〉

第73回「発酵食品のタベ」

案内人 出川洋介 学芸員
11月4日(土) 参加者 92名

今回はお話を聴きながら発酵食品を理解する(味わう)というスペシャルサロンでした。特別展「ふしぎな生きもの菌類」の閉幕前日の関連行事として「菌類感謝の日」と銘打ち、第1部の講演会(高田先生、内藤先生)の後、第2部をサロン「発酵(菌類)食品のタベ」とし、1)日本の伝統的発酵食品、2)エキゾチックな海外の発酵食品、3)秋の幸きのご料理の3部構成で開催されました。

日本の伝統食品の部では、地元の酒造や茶屋のご協力で日本酒や甘酒が振る舞われました。また、観察会に参加した子どもたちが作った手前味噌の披露、各地から駆けつけて下さった方々の発酵食品の手土産も楽しみました。案内人の進行の下、発酵食品について講師、製造者、食材を集めたスタッフたちからスライドを交えた解説があり、食材を試食し菌類に感謝しながら発酵食品を体験しました。(編集部)



円卓を囲んでの学習となりました

スタッフの感想から

調理を担当したボランティア各々が各地の珍しいカビやコウボを使った発酵食品やキノコを持ち寄り、バラエティあふれた内容で、皆さんに楽しんでいただけて嬉しく思いました。準備のことなど参加者と語り合う時間があると良かったです。(矢野倫子)

会費内で食材を準備するのが難しかったですが、きのご料理の上手なボランティアがたくさんいて、

おいしい料理とめぐりあえました。(武山育子)

代表的な発酵食品等は、各自に配布して試食いただいたらもっとよく知ることができたのではないかと思います。料理すると、どういう形状であったのかわからないものもあるので。(井上幸子)

友の会も協力して五感を生かす講座となりました。食材の準備にはかなりの労力を必要としましたが、多くの方がこれをきっかけに、菌類に興味を持ってくださると嬉しいです。(赤堀千里)

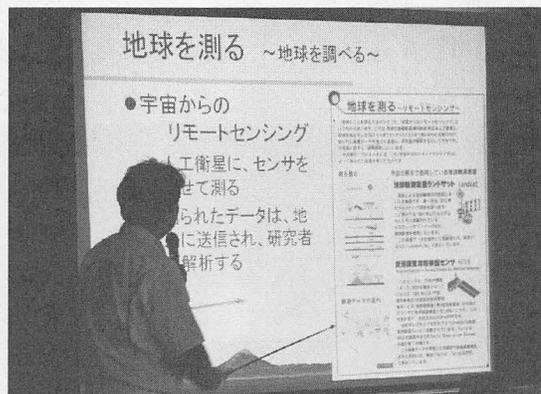
第74回「パノラマにつぼんをたのしむ」

新井田秀一 学芸員

12月16日(土) 講演会 37名 茶話会 26名

2月25日まで好評開催中の企画展「パノラマにつぼん～地球観測衛星の魅力～」に併せ、担当の新井田学芸員話題提供によるサロン・ド・小田原でした。

講演では「パノラマにつぼん」を構成する技術ーリモートセンシングや画像処理、立体化ーなどについて、その仕組みや方法、処理に当たって工夫した点などを分かりやすく説明していただきました。



リモートセンシングの仕組みをわかりやすく

新井田学芸員によると、今回の企画展の目的は、地球観測衛星の画像を使って日本の地形や環境の面白さを紹介し、地学など自然科学の興味を持ってもらうこと。確かに「中央構造線」といった「文字」では何となく知っていることを「画像」として目にすると、その特徴が一目でわかり(南西から見た四国など)、まさに“百聞は一見にしかず”です。質疑応答も活発で、関心の高さがうかがえました。

参考図書『宇宙から見た日本』については特殊な印刷技術によって作られていることが紹介され、こちらにも多くの関心が集まりました。(鈴木智明)

大磯丘陵テフラ観察会

① 関東ローム層の基本的な見方

9月23日(土) / 平塚市土屋付近 / 41名

② 最古のローム層を見る

12月16日(土) / 中井町曾我丘陵中村川沿い / 24名 / 講師: ①②とも、笠間友博学芸員

テフラとは耳なれない言葉ですが、火山灰やスコリアなど火山の降下火砕物の総称です。新生代第四紀の更新世は約100万年前から約1万年前の間をいいますが、人類が出現した時代です。また氷河時代ともいわれ氷河が消長を繰り返しました。我々は4回あったと昔習いましたが、最近深海の堆積物中の有孔虫の殻の酸素同位体比を測定することで、海水温の変化をさらに細かく読み取れるようになり、約10万年の周期で変動していることがわかりました。

大磯丘陵は関東ローム層からなり、箱根や富士山やもっと遠くの火山から来たテフラその他の降下物が堆積して厚い地層をなしていますが、その中に海進や海退の様子を見ることができます。今回の観察では、①の栗久保で約10万年前の海進堆積物であるKIP-13からKIP-3までの火山灰層の累層などを、②の柄沢で、大磯丘陵で一番古く約45万年前の地層であるTF-5というテフラ層などを見ることができました。



たけのこ採りではありません。TE-5の露頭です

テフラ層はその成分などから、どこから来たのか給源を確かめることができます。今回は②の柄沢でTE-5を見ましたが、これは黒雲母を多量に含むテフラで、手のひらに広げてみるときらきらと光ってすぐわかります。町田洋先生の『火山灰は語る』1977年刊に“このテフラはどこの火山から由来したものだろうか、八ヶ岳よりはずっと西方の火山であることは間違いない。”とありますが、現在では北アルプス槍ヶ岳西方の水鉛谷付近にあった火山に由来すると考えられています。

今回にしても、また前に学んだ箱根火山の生成史

の書き換えにしても、博物館や友の会の行事に参加し現地を見てお話を伺うことで、学問の進歩を身近に感じられ楽しいです。(新藤誠一郎)

植物入門講座「つる植物に注目」

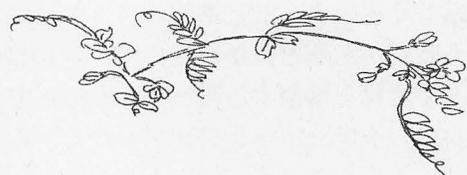
10月3日(火) / 博物館内実習実験室及び周辺の野外 / 49名 / 講師 勝山輝男学芸員

入生田駅近くの山神神社境内に集合し6班にわかれました。午前はこの周辺でつる植物の生態観察と標本採集。境内のふちにぎっしり生えた草の中からつる植物を探しました。植物の名前を私は3割ぐらいしか知らなかったのですが、班の人が教えてくれました。どんな環境に生え広がっているか、立上りの方法はどうか、また葉・茎・花・実も観察しました。20種ぐらい標本採集しましたが、ナツツタを取ると吸盤が樹に残り、吸盤を採集するのに苦労しました。



午前中採集したつる植物を使つての室内学習

午後は実習実験室で、まずつる植物について観察してきたことを出し合い、次に共通の性質を出し合つて、つる植物の定義をしました。そしてつる植物の立ち上げ道具別に採集した植物種名をあげました。からだ全体で寄りかかるもの9、とげ5、巻きひげ7、吸盤1、葉柄3、付着根3合計28種ありました。巻きひげは何から進化したものか、サルトリイバラは托葉、ヤブガラシは茎と分かりましたが、アレチウリは何かよくわからないでみんな悩みました。日頃やっかいもの扱いされているつる植物をじっくり観察できた1日でした。(山本正夫)



「晩秋の湯河原を歩く」植物観察会

11月18日(土) / 静岡県熱海市泉 日金山山麓 /
34名 / 講師 勝山輝男学芸員

8時30分、湯河原駅からタクシーに相乗りして観察地に向かいました。観察のテーマは「暖地性のシダと常緑樹を求めて」。

まず、勝山学芸員からクスノキ科のイヌガシ・シロダモ・ヤブニッケイの見分け方を説明していただきました。観察の道に入るとすぐに、イノデ・イノデモドキ・ウラジロ…イヌガシ・ウラジロガシ・アラカシ・リンボク・イズセンリョウ…と次々と出てきます。ルーペも使って毛や胞子などを何度も見ています。「また出てきますから～」と促されて先へ。途中、世話係の方から、シモダカナワラビ(オニカナワラビ×ホソバカナワラビ)、テンリュウカナワラビ(オオカナワラビ×コバノカナワラビ)についての説明がありました。両方とも雑種でそれぞれの親の特徴を受け継ぐとともに、大形で胞子は不稔で何時までも残っていて、繁殖は根茎で行われるとのことでした。シダは皆同じに見えて、とても難しいです。なんとか資料にあるシダをチェックし終えて、明るい林道に出ると昼食になりました。



暖地性シダ植物を学習中

午後からの林道では、名残のリンドウ・ヤクシノウ、赤い実をつけたマルバノホロシ・ツルリンドウのほか思いがけずアケボノソウやセンブリが咲いていて、根生葉も初めて見る事ができました。

何時もはなんとなく後回しになっていた「シダと常緑樹」に目を向けてくれた今回の観察会は、これからの山歩き、野歩きを楽しめるものにしてくれそうです。(早川典子)

早川水系の源を探る! Part10
「箱根の池巡り」自然観察会

11月25日(土) / 箱根湯本～芦ノ湯～阿字ヶ池～精進池～お玉ヶ池 / 39名 / 講師 新井一政学芸員、勝山輝男学芸員

雲一つ無い晴天の中、早川溪谷の紅葉を眼下に晩秋の箱根にバスで向かいました。朝の冷え込みで観察コースの日陰には霜柱や氷が残っていました。今回は早川水系の源(蛇骨川や須雲川)に湧出する水を辿り、中央火口丘の駒ヶ岳や二子山と新期外輪山の屏風山に挟まれた凹地にできた阿字ヶ池、精進池、お玉ヶ池の周辺を自然観察しました。阿字ヶ池は江戸時代のはじめ頃に干拓されて、防火用水として掘られた池が残るだけですが、近くに湿地だった証のオオミズゴケを見ることができました。



阿字ヶ池のオオミズゴケ

精進池に向かう鎌倉古道と精進池の周辺はマユミの果実が鮮やかに映え、酸性度が高く生き物が棲まないと思われた精進池には、鯉の泳ぐ姿を見ることができました。お玉ヶ池に向かう道筋の大きな石にはオオクボシダが、お玉ヶ池の湖畔ではアズマツメクサなど珍しい植物を観察することができました。



オオクボシダを観察する

今回の観察コースは文化的な史跡も多いので、次回は「早川水系の文化と歴史の探訪」で臨みたいと思いました。(佐藤昭男)

博物館講座紹介

<化石クリーニング教室>

学芸員 田口公則

■人気の化石クリーニング体験

皆さんにできるだけ本物の自然に触れてほしい、そして感動し興味関心を高めてほしい、という大きな願いがあります。今回紹介する「化石クリーニング教室」は入門的講座の一つです。“化石”という語が魅力的なのか人気が高く、毎回抽選での開催となり恐縮です。今年度開催した11月25日の講座では、小学生を中心に大人も一緒になって化石クリーニングを実践しました。

さて、化石クリーニングとは何のことでしょう？簡単に言えば、岩に入っている化石から必要な情報を得るために、余分な岩石等を取り除く作業のことです。野外で周りの岩石ごと採集された化石が、室内でのクリーニング作業によって化石が取り出され、整形されて標本となります。

■化石講座のねらい

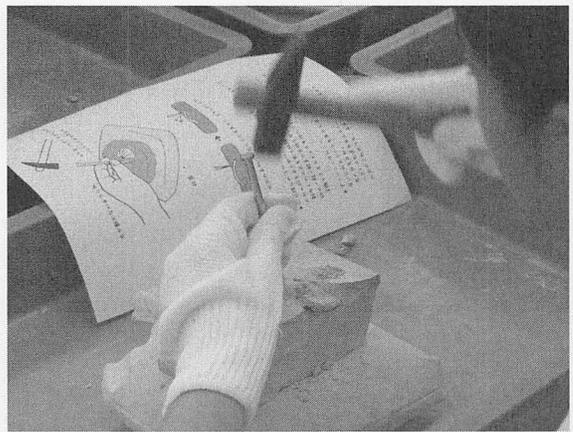
この講座のねらいは、化石関連の作業を実際に体験し、作業の大変さ、化石発見の喜び、化石標本収集の重要性などを学んでもらうことです。

日常、石や岩を割ったり削ったりすることはないでしょうから、まずは岩に親んでもらうよい機会となります。実際に岩のどこを叩けば割れやすいか、大きく削るか、或いは少しずつ削った方がよいのか、それぞれの岩や化石の状態に応じて判断しなければなりません。化石クリーニング作業は何度も試行錯誤を重ね、体得する技術ともいえます。作業の大変さを知ることで、展示室の化石展示の見方が変化することも、期待するところです。

この講座では「化石が見つかってよかったね」で終わりにせず、皆さんが標本にした化石は博物館に収蔵します、という方針をとっています。自分たちが苦労した作業が、実は博物館活動に貢献している、ということにつなぎたいからです。化石が標本になるまでには、1.化石発見→2.観察・記録→3.採集→4.こん包・運搬→5.クリーニング→6.分類・同定→7.整理・保管、という一連の作業があります。講座参加者の皆さんにも、クリーニング作業と分類、整理作業の一部を担ってもらおうというわけです。

■化石クリーニング用の材料

最近、化石発掘という名で、化石を埋め込んだ材料がキットで販売されています。ハンマーやタガネを使い慣れていない場合、いきなり実物の岩を使用する前に、確実に化石を取り出せるキットがよい練習材料になります。今回は「なぞの岩」と称してアンモナイトの化石を埋め込んだ砂岩（擬岩）を準備し、クリーニング練習からスタートしました。「なぞの岩」と呼ぶのは、初めから「偽物です」と案内しては面白くなるからです。「この化石は本物？」の参加者からの問いには、「本物です」と答えます。すると、夢中になって岩からアンモナイトを取り出します。作業の後、「この岩は本物の岩ですか？」という私の問いには、みなさん自ら見つけた証拠を基にしっかり「偽物」と答えてくれました。



クリーニングの様子

もう一つの材料は、愛川町からの250万年前の岩石です。中津層群とよばれるこの地層からは多数の貝化石のほか、サメ、クジラ、ゾウ、サルといった様々な動物の化石が産出しています。講座中に動物化石が見つかる可能性が高く、これまでも貝化石以外にサメの歯や動物の骨化石が見つかっています。

何がみつかるかわからない材料に、学芸員もワクワクします。「これは化石だ」と判断できる専門の視点が重要です。そのためには数多くの化石、つまり生物の形を知っておく必要があります。また、変わった形に気がつく注意力も大切でしょう。

■まとめ

岩から化石を見つけることは、とても楽しい作業です。完全ではないものが見つかるからこそ、いろいろ推察ができます。何年も続けていると完全な化石が見つかり、疑問を解決するかもしれません。そんな楽しみを皆さんと気長に続けられたら嬉しい、そう思って様々な企画に知恵をしぼっています。



ふ・し・ぎ <なぜだろう?を育む>

ちそう さかいめ
地層の境目

学芸員 笠間友博

写真を見てください。関東ローム層には、このように大きな噴火(ふんか)で積もった軽石(かるいし)の地層(軽石層)があります。

地層は下から上に積もっていきますが、この軽石層と上下の赤土(正式には火山灰土(かざんばいど)と言います)との境目に注目しましょう。下はハッキリしていますが、上は軽石が散っていてボンヤリしています。地層の境目もよく見るといろいろありそうですが、関東ローム層で見られる軽石層の境目は「下がハッキリ、上はボンヤリ」というものがとても多いです。今回は、この理由を考えてください。たぶん1つではないでしょう。いくつ考えられますか。紙面では一方通行になりますので、回答例を少し書いてみます。

- ① 軽石の大きさが上と下では違う、下は細かいのでハッキリ見えるのだろう。
- ② 下の軽石はザーッと一気に積もり、上の軽石はポツポツまばらに積もったのだろう。
- ③ 上の赤土が積もった時に、水で流された軽石が混ざったのだろう。
- ④ 上の赤土が積もった時に、動物が赤土と軽石を混ぜたのだろう。
- ⑤ 草の上に軽石が積もり、草に引っかかっていた軽石が赤土の中に散ったのだろう。
- ⑥ 雨がしみこんで、軽石が上から溶けて消えていったのだろう。

ほかにもありそうですが、考え方のポイントは地層が積もる速さの違いです。軽石層は15cmの厚さがありますが、おそらく数時間~数ヶ月で一気に降り積もったものです(噴火の時間とは一般的にそのようなものと考えられています)。それに対して上下の赤土の部分は、小さな噴火による火山灰(かざんばい)に土埃(つ

ちぼこり)なども加わりますが、例えば10cm積もるのに100年以上もかかります。2004年浅間山(あさまやま)噴火でも、県北部で灰が少し降りました。このようなものの積み重ねと考えられています。

つまり赤土の上に一気に軽石が積もり、下の境目はすぐできるので「ハッキリ」。上の境目は、赤土がゆっくり積もるのですぐにはできず、その間にいろいろな理由で軽石と赤土が混ざってしまうので「ボンヤリ」になっているのです。

①に気が付いた人はするどいですね。①や②は×ではありませんが、噴火のしかたにはいろいろあり軽石層のすべては説明できません。噴火とは無関係に、長い時間かかって赤土と軽石が混ざっていく理由を考える必要があります。③は考えられます。ただし軽石は丸くなっていませんので川のような強い流れではなく、雨が降った時に少しずつ流されるようなことです。④も考えられます。噴火後、生き物がもどり、大きな動物が踏んだり、土の中の動物の活動で混ざっていくことはあるでしょう。⑤は赤土が積もるまで何十年も軽石は草に引っかかかっていませんので×ですが、赤土がたまりだして芽や根が軽石を持ち上げることもあるでしょう。⑥は×です。軽石は雨の水で溶けて消えません。



最後にもう1つ問題です。噴火で一気にうまったイタリタのポンペイの遺跡(いせき)は、どちらの境目にあるのでしょうか?おわかりですね。下のハッキリの境目です。遺跡もうまるのに時間がかかると、いろいろなはたらきでこわれてボンヤリになってしまいます。

写真の説明 軽石層は名前を三色旗(さんしょくき)軽石層といいます。オランダやドイツなどの横分けの三色旗に見えるでしょうか? この噴火には3回の活動があったのかも知れません。箱根火山の約5万年前の噴火です。小田原市久野 諏訪原(くのすわのはら)にて。

私の応援メッセージ!

「放課後博物館」と友の会

平塚市博物館館長 浜口哲一

私が『モンキー』（日本モンキーセンター友の会会報）241号に「放課後博物館の夢」と題する一文を投稿したのは、1992年でしたから、もう15年近くも前のことになります。博物館には非日常的な楽しみを与えてくれる「遠足博物館」と、日常生活の中でさまざまな形で活動に参加できる「放課後博物館」があり、それらが博物館の両輪ではないか、また市立の博物館としては後者を目指していきたいというのが、その文章の要点でした。

この冊子が出て間もなくのこと、浦本昌紀先生から、放課後博物館という発想に賛同するという励ましのおハガキをいただきました。浦本先生は、鳥の世界の大先生で、私も学生時代にひとかたならぬお世話になったのですが、一方で筆無精と言われる方でもあります（失礼をお許し下さい）。その方がわざわざ連絡を下さったということは、この考え方が的をはずしていないのだと自信が付き、それ以来、この言葉をキーワードに博物館のことを考えてきました。

2000年には『放課後博物館へようこそ』（地人書館）という単行本をまとめることができたのですが、その時には大阪市立自然史博物館長を務められた宮武頼夫先生から、読後感を記したお手紙が届きました。宮武先生からは、放課後という言葉は、学校のことだけでなく、定年退職された方の人生の放課後という意味なども含め、幅広く考えるとよいというアドバイスをいただきました。放課後博物館という言葉が辞書に載るのは遠い先の話かもしれませんが、これからもそのイメージの確立に努力していきたいと思っています。

さて、放課後博物館の眼目の一つが館活動への市民参加であることは言うまでもありません。平塚市博物館では、数多くの行事を実施していますが、その特徴の一つとして、さまざまな成果を生み出した会員制の行事が多いことがあります。たとえば、「相

模川を歩く会」では見聞した情報を元にして『相模川事典』という本を作りました。「星祭りを調べる会」の調査活動は『里に降った星たち』という特別展にまとめられました。「空襲と戦災を記録する会」の活動からは、『市民が語る平塚空襲』という本ができたと同時に、戦災関係のコレクションの充実もはかられました。「石仏を調べる会」では、30年来、全市的な石仏のデータベース作りに取り組んでいます。



平塚市博物館の「石仏を調べる会」

重要なことは、これらの活動の成果が、本、展示、コレクションのように、具体的な形のあるものになったということで、そこに博物館らしさがあるのではないかと考えています。博物館の究極的な役目は、資料と情報の蓄積ということでしょうが、そうした共有財産の形成に市民がさまざまな形で関われるのが放課後博物館だと思うのです。

ところで、放課後博物館と遠足博物館は、博物館の分類であるとともに、一つの館の活動の二つの側面を表す言葉だとも言えるでしょう。県立の博物館は、遠足博物館としての魅力を強く求められるでしょうが、一方でその放課後博物館的な部分を担う大きな要素が友の会なのではないでしょうか。生命の星・地球博物館を、会員の皆さんにとっての放課後博物館として見守り、育てていただきたい、そう期待しています。

〔編集部より〕

会員や博物館職員の皆さんにとって、生命の星・地球博物館は“マイ・ミュージアム”ですね。それぞれ親しみをもって関わっていらっしゃることと思います。では、外の人々はどう見ているのでしょうか。「博物館」に関わりのある様々な立場の方にご登場いただき、友の会、そして博物館へのメッセージを受け取ることで、多角的な視点をもってマイ・ミュージアムを応援していこう！というシリーズです。今後にも、どうぞご期待ください。

■ わたしの選ぶ “この一冊”

学芸員 平田大二

『科学と科学者のはなし』

寺田寅彦エッセイ集 池内 了編
岩波少年文庫、岩波書店 初版2000年6月16日

最近の宇宙地球科学分野では、宇宙、地球、生命の関わりをシステムとしてとらえる、という考え方があります。実は、80年以上前にそのことに気がついていたのが物理学者の寺田寅彦です。

その一面は、次の小文の一節にあらわれています。「宇宙の秘密が知りたくなったと思うといつのまにか自分の手は一塊の土くれをつかんでいた。そうして、ふたつの眼がじいっとそれを見つめていた。すると、土くれの分子の中から星雲が生まれ、その中から星と太陽が生まれ、アミーバと三葉虫とアダムとイヴが生まれ、それからこの自分が



生まれてくるのをさまざまとみた。…そうして自分は科学者になった。(後略)」(大正9年8月、渋柿)。私は、この一節がとても気に入っています。

寺田寅彦は優れた科学者であるとともに、市民に科学の面白さを伝える随筆家でもありました。今回の本は、宇宙物理学者である池内了氏が、寺田寅彦全集の中から38の随筆を選んだものです。池内氏は高校生の時に寺田寅彦の随筆集を読み、科学者を目指したそうです。寺田寅彦は、身近な自然や日常生活での体験を材料にして、人間の五感を大事にしながら、そこに思いがけなく発見した科学の法則や、先入観の間違いに気がついたことを随筆にしています。今回の本では、有名な「茶碗の湯」や「電車の混雑について」などのほか、地学や生物、花火、果ては化け物のことまで、それぞれを科学的な視点でとらえ随筆が選ばれています。ものを観察し、考える、と言う科学的思考の面白さを存分に味あわせてくれます。

私が初めて寺田寅彦の名前を耳にしたのは、高校生の時でした。高校の数学教師をしていた叔父が、科学の面白さを伝えようと全集を見せてくれたのですが、当時の私にはそれがわかりませんでした。あれから30数年、ようやく叔父の思いがわかってきました。科学が好きで、子どもが大好きであった叔父の苦笑いが眼に浮かびます。

■ 会員の活動紹介

「箱根蝶の会」

会長 露木太一

箱根と小田原を中心として、平成7年に発足した蝶屋の会です。

富士箱根伊豆国立公園の神奈川県内の箱根山及びその山麓には、現在80数種の蝶が記録されています。最近の温暖化の影響？か、南方系のアゲハチョウ科のナガサキアゲハ、タテハチョウ科のツマグロヒョウモン、シジミチョウ科のムラサキツバメが分布を広げて、定着したようです。このような蝶の分布記録を、機関誌「箱根と蝶」(写真は記事の抜粋)に記載しております。

また、アサギマダラのマーキングということもやっております。アサギマダラはマダラチョウ科の蝶で、「渡り」をする蝶として知られています。当地ではどこでも見られる美しい蝶で、特に駒ヶ岳、大涌谷や金時山などで多数見られます。この蝶を捕獲して、ハネに油性のマジックペンで必要事項(日付、

場所、氏名)を記入して放してやるのです。

箱根でマーキングされたアサギマダラが三重県、愛知県、長野県などで再捕獲され、長い旅をしたことが確認されております。

会員の中には、生命の星・地球博物館の高桑正敏学芸部長がおられ、ご指導を受けております。また、友の会会員の人も私をはじめ5人いて活躍しています。春は七草粥、秋には野生のキノコが10種類以上も入ったキノコ汁を食べる会などを催し、会員の親睦を図っております。

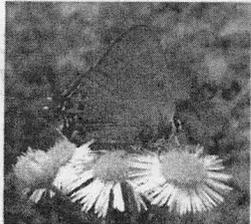
静岡県小山町のミヤマカラスシジミの記録

吉川 武志

静岡県小山町でミヤマカラスシジミを記録できたので報告します。

2006年7月8日 ミヤマカラスシジミ 2羽
静岡県小山町湯船原 標高約400m

箱根町仙石原や山中湖に至る三國峠での記録がありますが、本産地はその中間地点で標高はかなり下がります。



博物館 NOW

“発信する博物館”を目指して

生命の星・地球博物館企画情報部長 二川幸夫

「博物館が危ない！」「指定管理者制度の導入は？」等々…。今、博物館を巡って、各地域で、このようなタイトルのシンポジウム、講演会が盛んに行われています。

博物館を取り巻く社会環境の変化、とりわけ行政改革の波が押し寄せる中で、多くの博物館では、その存在意義が問われ、また、運営主体・運営方法においても見直しを迫られています。そして、わが生命の星・地球博物館もまた、例外ではありません。

そんな状況の中、この博物館に来て間もなく2年が経ちますが、この間、当博物館が社会に果たしている役割を再認識する場面がいくつかありました。この厳しい時代にあって、博物館の存在感を示していくには、博物館が果たしている役割、つまり社会への貢献度を、県民はじめ多方面に訴えていくことが不可欠です。

マスコミを通じてのPR効果ももちろんあるでしょうが、何と言っても、博物館の使命（ミッション）を明確にし、中長期計画の策定や、それに基づく評価を公表していくことが求められています。また、博物館の最大のサポーターである「友の会」からの発信は、特に大きな力になると思います。

いうまでもなく、博物館は資料を収集保管し、次世代へ伝える事が使命です。これをもとに調査・研究を行ない、また、その成果を展示や教育普及活動として、県民の皆さんに還元しています。調査研究の成果は、神奈川県、さらに広範囲にわたって、自然環境の保全に役立ち、貢献しています。特に昨年7月の「レッドデータブック」の刊行や、「丹沢大山の総合調査」における成果報告、また、外来生物による生態系の変化への警鐘など、博物館職員からの発信は大きな意味があると感じています。

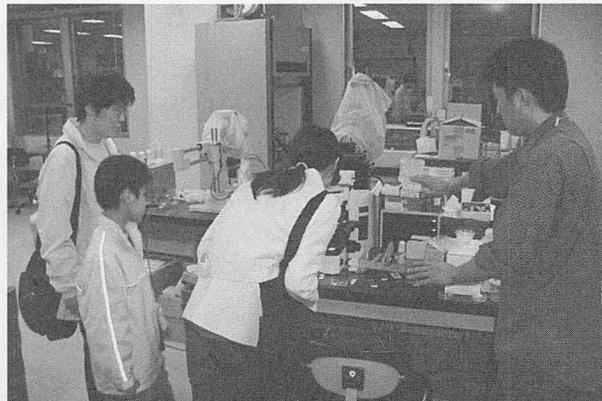
博物館を取り巻く環境は厳しいものがありますが、そんな博物館と共に、開館以来応援団、支援団体として歩み続けてきた「友の会」に感謝するとともに、さらに充実した組織として発展していくことを期待しています。

開かれた博物館として、「友の会」とどう協力関係を保っていくか、お互い自立した中での良い関係が築ければと切に願っています。

友の会の1年を振り返る

企画部の活動から

友の会が新体制になって早2年目を迎えました。この間、企画部では会員の皆様のご期待に少しでも応えられるように、今までの講座に加え新たな企画の下、新しい講座を催しました。例えば「魚の標本を作ろう」「磯の生きもの観察会」「早川の野鳥子ども観察会」「バックヤード探検隊」などです。



出川学芸員の菌類への思いのこもった説明を聞く

また、総会と組み合わせた親睦イベントを開催し、春の博物館周辺の野山を、多くの学芸員と共に散策しました。これはたいへん好評でしたので、今年度総会（4月8日）でも企画進行中です。

博物館と協働の共催事業「サロン・ド・小田原」も充実した催しを行うことができました。詳しい内容は、友の会ブログ <http://blog.livedoor.jp/kpmtomo/> をご覧ください。まだ参加されてない方、サロンに出かけたくなること請け合いです。

最後に会員の皆様に、お願いがございます。来年度の友の会講座には、様々な企画が上がっていますが、これは面白そう！ あれもやりたい！となるのですが、イベント・講座の担当者と申しまししょうか、世話人が足りません。そこで、世話人になっていただける方を募ります。どたなかいらっしやいませんか。これはと思う講座がありましたら、まずは事務局までお問い合わせください。友の会の充実のため、ひいては博物館支援のため、宜しくお願いいたします。（企画部 関口康弘）

現在世話人募集中の講座企画

- ①早川水系の野鳥観察会
- ②磯の観察&貝を調べよう
- ③バックヤード探検隊
- ④化石採集講座
- ⑤地図をたのしもう
- ⑥道志山に治山の知恵を学ぶ

ミューズ・フェスタ 2007 の開催に向けて

博物館の開館記念日事業は、本年度も博物館が主体となり、友の会、小田原市、地元の入生田自治会が協力、連携して、3月17日(土)・18日(日)の2日間で、ミューズ・フェスタ 2007 を開催します。すでに協力団体によるミューズ・フェスタ 2007 実行委員会が3回開かれ、催事の内容がほぼ決まりましたので、ご紹介します。

共通テーマは昨年と同様の“マイ・ミュージアム”で、世代間交流、自然体験をキーワードとし、メインイベントや交流会を実施することになりました。

「世代間交流」の大きな柱は、次世代への伝承です。「自然体験」は、自然を楽しみ、理解し、表現するための基盤です。いずれも博物館にとって重要な要素ですので、交流会は、“自然遊び”をテーマにして開催することになりました(そのほかの催事については、同封のチラシをご覧ください)。

友の会では、交流会の中で“自然遊び”に相応しいものとして、映画「森の学校」(原作 河合雅雄 著 『少年動物誌』)の上映を企画しました。映画は、昭和10年頃を舞台にした子どもたちの世界を描いたものですが、懐古趣味や単なる素朴な生活の賛美でも、高度な文明生活を否定するものでもありません。子どもの健全な成長には、豊かな自然に包まれ、家庭を中心として学校と地域が緊密に連携しあい、大人の温かいまなざしの中で育つことが、いつの時代でも大切なことを教えてくれます(詳細はパンフレットをご覧ください)。

上映に当たってはフィルム貸出し料などが必要になりますが、ミューズ・フェスタに参加する多くの方に見ていただきたいことから、友の会の事業費を充てて、参加費を無料として実施します。また、会



森の学校のパンフレット

員の皆様には事前申込み(先着200名)で交流会の参加を募ります(詳細は同封の申込み方法をご覧ください)。

また、新しい試みとして、企業の協力を得て「画像の科学」というテーマの実験ショーを行います。人や生き物の目に画像(色彩)がどのように映るのか、楽しく学べる企画です。そのほか、友の会活動紹介や入会キャンペーンを行います。また博物館主催の催事にも協力し、ミューズ・フェスタ全体を盛り上げたいと思いますので、皆様のご協力をお願いします。(実行委員 佐藤昭男)

「学芸員の岡村綾子と申します！」—職員紹介—

現在、臨時職員(学芸員)として、自然誌資料の編集、鳥類の骨格標本・仮剥製の製作、標本整理などをさせていただいております。個性的な学芸員の方たちに囲まれ、博物館ならではの仕事を毎日あたふたと行っているうちに、あっという間に4ヶ月近くが経ってしまいました。もともと大学では畜産学を専攻していたということもあり、哺乳類のほうに身近だったのですが、最近では猛禽類の調査に参加する機会もあったり、鳥類の標本作製することも多くなったりと、鳥類も身近な存在になってきました。まだまだ勉強不足の未熟者ですが、少しでも皆さんのお役に立てるように頑張りたいと思います。来年3月までと短い期間ですが、どうぞ宜しくお願いします。

情報クリップ

◇会員状況 2006年12月13日現在
正会員 587名、賛助会員 1名 計588名
無料優待券の利用状況 131枚

◇会員継続のお願い
会員更新の時期となりましたので、同封いたしました継続会員用「払込み取扱票」にて、手続きをお願いいたします。3年会員の方は、切り替え時期を確認の上、会費払い込みの重複がないようご注意ください。手続き方法など詳しくは、送付状をご覧ください。

◇「ネコの手貸し隊」へ登録しませんか!
友の会事業である催事や講座、会報の発送作業などなど、小さな力を合わせて運営を進めています。ご協力いただける方は、ぜひ登録をお願いします。新しい仲間ができること、博物館に詳しくなること、自然科学の学習がより身近にできること…楽しいオマケがたくさんついできます。

行事案内

◆◇第11回友の会総会

日時 2007年4月8日(日) 10:00~15:30
 総会 10:00~11:00
 コース選択制催事 12:45~15:30
 場所 総会 博物館1階 西側講義室
 催し 野外、博物館バックヤードほか

催事

①博物館周辺の身近な自然観察会(野外)

a: 入生田山神社と長興山枝垂れ桜コース
 b: 石垣山一夜城と自然に親しむ道コース
 友の会通信「博物館周辺の身近な自然」に紹介された場所を散策します。昨年と同じコースを歩く
 定点観察もよし、別のコースを味わうもよし。

②バックヤードツアーで博物館を知る(室内)

普段見ることができない博物館の裏側、標本製作室や収蔵庫など、バックヤードをじっくり見学します。運良く標本製作現場に出会えるかも。

※ 時間等、変更になることもありますので、3月6日に発送予定の「総会のご案内」をご覧ください。

◆第75回 サロン・ド・小田原

3月のミューズ・フェスタ交流会のプレ企画として、自然体験の原点といえる「自然遊び」をテーマにサロン・ド・小田原を企画中です(詳細は別紙)。

日時 2007年2月23日(金) 17:30~予定

◆地図をたのしもう!

日時 2007年2月11日(日・祝)
 場所 博物館実習実験室

◆植物観察会「頭高山の春探し」

日時 2007年3月9日(金)
 場所 秦野市 頭高山

◆植物観察会「朝霧高原」

日時 2007年4月20日(金)

◆南下浦断層&初声断層観察会

日時 2007年4月21日(土)
 大潮最良期に合わせて、4月に変更しました。

◆早川水系の野鳥観察会

日時 2007年5月3日(木・祝)

◆ざくろ石を集めよう

日時 2007年5月13日(日)

◆魚の標本を作ろう

日時 2007年5月19日(土)

◆西丹沢玄倉川観察会

日時 2007年5月19日(土)

◆植物観察会「城ヶ島」

日時 2007年5月22日(火)

このほかにも催しがたくさんあります。総会案内に同封される「2007(H19)年度行事一覧表」や講座案内のチラシ、「友の会通信」でお知らせします。
 ※日程など変更される場合がありますので、申し込みの前に、必ず確認されるようお願いいたします。

『神奈川県レッドデータ生物調査報告書 2006』 発売中!

学芸員や博物館に協力してくれる研究団体が、絶滅危惧生物の現状を調べた成果が出版されました。

今回の調査で得られた最新の情報によると、以前にも増して、多くの生物が姿を消しつつあることがわかりました。この報告書は11年前に作られた神奈川県版のレッドデータブックを改訂したもので、今回の報告書には、コケや菌類など、より多くの生物群が載っています。

442ページ、A4判、税込2,000円(送料別550円)博物館のミュージアムショップで購入できます。

詳しくは下記URLを参照してください。

http://nh.kanagawa-museum.jp/kenkyu/reddata2006/2006_07.html

◆次回の通信発送予定 2007年5月

◆各行事への参加申込み方法

行事への参加申込みは、同封チラシを参照の上、友の会事務局までお申し込みください。

発行：神奈川県立生命の星・地球博物館 友の会
 Vol.10, No.4, 通巻55号 2007.1.10 発行
 編集 友の会広報部
 〒250-0031 神奈川県小田原市入生田499
 TEL: 0465-21-1515 FAX: 0465-23-8846
 E-mail: tomonokai@nh.kanagawa-museum.jp